

## 三 内 丸 山 遺 跡

青森県教育庁文化課

三内丸山遺跡対策室主事 上野 茂樹

読者の皆さんには、仕事がら、遺跡や埋蔵文化財と関係が深い方がいらっしゃったり、出張などで、多くの市町村を訪れ、時間があけば、現地にある博物館や資料館の見学をすることが好きな方がいらっしゃると思います。

ですが、遺跡の説明を聞いたり、博物館等の解説を読んだりしても、解ったような解らなかったような気になることが多いと思います。それは何故なのでしょうか。

説明は、ある土器にはA遺跡からでた、別な土器にはB遺跡から、ある石器はC遺跡から、というように、さまざまな遺跡の名前があります。また、そこで展示されている遺物の大半が土器や石器だけで占められていることもあります。繩文時代の人が単純なものしかもっていない、どこでも同じだと思ったと思います。それは、そこからは、生きていた人がよく見てこないということがあったからだと思います。



遺 蹤 全 景 (平成 6 年 10 月)

ところが、三内丸山遺跡は、縄文時代の人々の暮らしを、いきいきとしたかたちで、わたしたちの目の前に明らかにしてくれたのでした。

三内丸山遺跡は、青森市の市街地からは、直線距離で約3キロメートルほど、八甲田連峰の山裾からのがる標高約20メートルの台地上にあります。

遺跡あるいは埋蔵文化財というものは、地下にあるものですから、存在の確認が難しいものです。畑を耕している最中に土器や石器が見つかることで気付かれたり、崖崩れのあとや工事中の発見で、解ることがほとんどです。注意していなければ、気付かれないこともあります。

ところが、この三内丸山遺跡は、江戸時代から、土器や土偶が見つかることで知られていました。当時の日記のひとつである『永禄日記』の元和九年（1623）の記録や、また、当時の旅行家であり文人でもある菅江真澄の著した『すみかの山』のなかで紹介されています。

そのほかにも、地元の人々が畑を耕す際に多くの土器が見つかることが解っていたところから、戦後、大学などによる小規模な発掘調査が実施されました。また、昭和51年には青森県総合運動公園西駐車場の整備とともに発掘調査が実施されました。

その後、平成4年から、新県営野球場の建設に先立ち、発掘調査が実施されること

になったのです。

ところが、野球場建設予定地約5ヘクタールの調査が進むにつれ、縄文時代の前期中頃（約5,500年前）から中期（4,000年前まで）を中心とする、きわめて長期にわたって継続的に営まれた縄文時代の集落であることがわかつてきました。

さらに、野球場予定地周辺の調査から、約4,500年前の縄文時代中期中頃には、30ヘクタールを越す範囲に人々の暮らしが広がっており、縄文時代としては、日本屈指の広さをもつ遺跡であると想像されます。

縄文時代のいきいきとした人々をお伝えするために、「住・衣・食」の順で三内丸山遺跡の姿の一部を紹介します。

まず、住からみてみましょう。この遺跡をこれまでに調査された竪穴住居は約580棟です。長さが10m以上に及ぶ大型竪穴住居は10数棟見つかっていますが、数家族が共同生活していたという説や集会所や共同作業所という説、冬季間の住居という説があります。

また、穴を掘り、木の柱を立てて造った掘立柱建物跡が100棟以上見つかっています。この掘立柱建物のなかには、遺跡の北西端から検出された大型の掘立柱建物跡が注目されています。この遺構は柱を立てるためにあけた穴の直径と深さが約2m、なかには直径約1mのクリでつくられた柱が残っていました。穴は6個あり、いずれも

4.2m間隔でつくられていきました。縄文時代に長さの基準があり、それをもとにして立てたことがうかがわれます。この規模から、立てるために、きわめて多くの人々の協力があったことが考えられます。

ほかには、地面を掘り込んで造った約100基の大人のお墓、普段の生活で使っている土器を転用した880基ほどの子供のお墓が見つかっています。

さらに、堅穴住居をつくったさいのでた土や煮炊きした後に生じた灰や焼土を土器や石器とともに捨てた、盛土遺構と呼んでいるところがあります。この盛土遺構は、土器の変化から約1,000年にわたって継続的に棄てられた結果によるものであることがわかつてきました。

一方、衣の方をみてみると、三内丸山遺跡からは、平織りとみられる布の一部や、あじろ編みをしたいわゆる「縄文ポシェット」が見つかっており、約5,500年前の縄文時代前期中頃からは、すぐれた布を製作する技術をもっていたことがわかります。

さらに、植物を利用した装飾品も見つかっています。つる性の植物を利用してつくった腕輪や2本を1組とし、それを5組組み合わせてつくった組み紐などです。髪を結い、それを飾ったと思われる、動物の骨でつくられたヘアピンや、木製の櫛も見つかっています。とくに櫛については、漆が塗られており、漆にかぶれる人が今でも

いることから、漆にかぶれない人や漆を扱う高度な技術を持つ人々がいたことが想像されます。

食の方に目を転ずると、海の幸では、タイやヒラメやブリ、アジやイワシなどの魚類のほかに、クジラやイルカなどの海にすむ哺乳類の骨が見つかっています。クジラの骨は、刀として加工されていて、魚では、ニシンやタラのような寒流系の魚もあり、年中、魚には困らなかったような生活が浮かんできます。

また、山の幸は、動物では、イノシシ、シカやウサギ、ムササビのほかに、クジラやイルカなどの海に住む哺乳類が見つかっています。出土している。また、ガンやカモなどの鳥類も見つかっています。

木の実や植物の種子では、クリやクルミなどが大量に見つかっていますが、なかには食用にならないニワトコという小さい種子が層をなして見つかっています。このことから、アルコールを得るためにニワトコを利用したのではないかとみられています。

また、ヒョウタンの種子もみつかっています。ヒョウタンは、熱帯産であり、人が手を加え雑草を除去しないと生育が難しいともいわれています。このことから、海や山の幸に頼るだけでなく、ここでもまた、自然により積極的に関わろうとした三内丸山遺跡の人々の姿がみえてきます。

また、新潟から運ばれたヒスイ、北海道

の黒曜石、秋田県産のアスファルト、岩手県久慈市産のコハクなども見つかっており、当時の人々はせまい範囲のなかで暮らしていたのではなく、大きなネットワークを持って生活していたようです。

以上のように、三内丸山遺跡は、当時の人々の暮らしや工芸技術・土木技術さらには自然環境の解明が期待できる、いきいきとした縄文時代の再現が期待できる、全国的に例のない貴重な遺跡です。

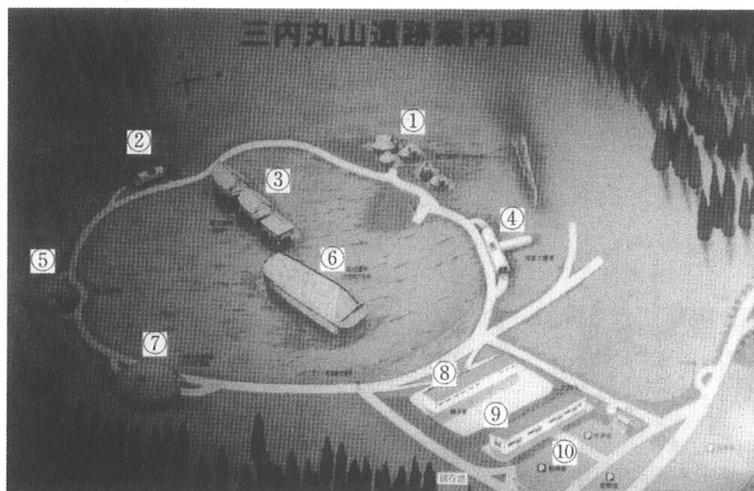
青森県では、三内丸山遺跡を保存・活用することとし、これまでに、遺跡からの出土品を公開する展示室を整備し、竪穴住居5棟、高床倉庫3棟、大型竪穴住居を1棟

復元するとともに、調査時の状況を覆屋をかけて保護し、年間を通して遺構を見学できるようにするなど、縄文時代を体験できる歴史公園として、整備を進めています。

また、市民の側でも、ボランティアによるガイドを開始し、毎日朝9時から1時間毎に案内しています。

遺跡の整備は、これからも、お墓の復元や体験学習の実施などさまざまな事業が計画されています。訪れる度に、姿をかえる成長する遺跡整備です。

ぜひ、三内丸山遺跡を見学に訪れてください。



- ①竪穴式住居（復元建物）
- ②北盛土覆屋
- ③掘立柱建物（復元建物）
- ④南盛土覆屋
- ⑤埋設土器（子どものお墓）覆屋
- ⑥大型竪穴式住居（復元建物）
- ⑦大型掘立柱建物跡
- ⑧展示室
- ⑨休憩室
- ⑩駐車場



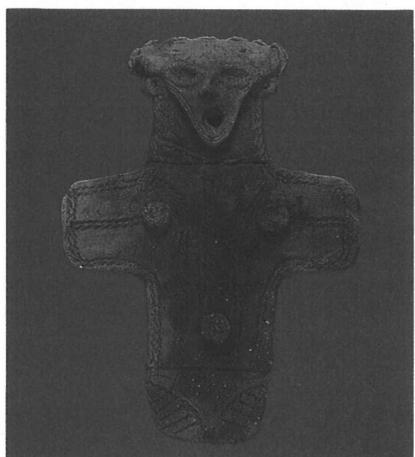
大型掘立柱建物跡



盛土遺構



巨大木柱



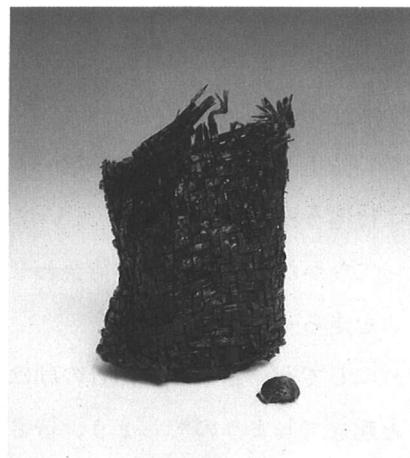
日本最大の板状土偶



土留めの杭と貼りつけられた土器



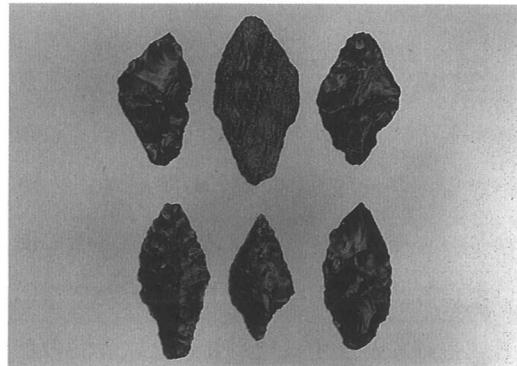
出土した様々な土偶・岩偶



小型編物かご  
(“縄文ボシェット”)



漆 器



黒曜石（北海道産）